

# 会 議 録

## 1 会議名

令和5年度第2回有田区地域協議会

## 2 議題（公開・非公開の別）

### 【協議事項】

- ・地域の活性化につながる取組について（公開）

## 3 開催日時

令和5年7月24日（月）午後6時30分から午後7時30分

## 4 開催場所

上越市カルチャーセンター ミーティングルーム

## 5 傍聴人の数

0人

## 6 非公開の理由

—

## 7 出席した者（傍聴人を除く）氏名（敬称略）

- ・委員： 熊木敏夫（会長）、樺沢早苗（副会長）、五十嵐里枝、池田憲雄、  
内山幸一、栗間良子、高橋邦夫、高橋秀樹、藤井英夫、渡辺恵子  
（欠席者7名）

- ・事務局： 北部まちづくりセンター：佐藤所長、近藤副所長、小川係長、丸山主任

## 8 発言の内容

### 【近藤副所長】

- ・会議の開会を宣言
- ・上越市地域自治区の設置に関する条例第8条第2項の規定により、委員の半数以上の出席を確認、会議の成立を報告

### 【熊木会長】

- ・挨拶
- ・会議録の確認：高橋秀樹委員、藤井委員に依頼

議題【協議事項】地域の活性化につながる取組について、事務局へ説明を依頼

### 【小川係長】

前回の会議では、これまでに出された取組案を、実施している事業、実施していない事業に整理していただいた。整理した結果は、事前にお送りしたA3の資料、「有田区における『地域活性化の方向性』」の「各構成要素に関する、これまでに出された取組案（地域協議会委員、地域住民から）」に整理させていただいた。そのなかで、前回お聞きした、実施済、実施中のもの、実施していない事業に分け、実施済、実施中の事業には、関連団体を分かる範囲で記載した。前回、進め方を検討していただいたときに、当初事務局としては、実施していない事業のなかから新たな取組を検討することが活性化に繋がるのではと考え、その方向で進めることを提案させていただいた。しかしながら、実施していない事業については、市や地域では取り組めないものが多く含まれており、このなかから検討するのは少し困難なのではないかと考えている。また、前回の会議で、実施している取組にも課題があったり、検討する必要がある取組もあるのではないかと、というご意見もいただいた。この間、地域協議会の皆様に、地域活性化の方向性を検討していただいて、キャッチフレーズ、将来のありたい姿や、それを支える柱、構成要素を検討していただくなかで、委員間の認識の共有が図られ、また前回の会議において、有田区における取組の状況も共有することができたと考えている。これらを踏まえて、地域協議会において、地域活性化の方向性に向けての実現に向けて、さらに検討の深掘りを行っていききたいと、事務局としては考えている。

・資料No.1 『『地域活性化の方向性』の実現に向けた体制について』に基づき説明

地域協議会として取り組む際には、検討するテーマを構成要素から選び、自主的審議により協議を行い、地域住民と課題解決を図ったり、市に意見書を提出したり、地域独自の予算を提案するなどの方法により、課題解決、実行に向けて、結びつけていくという流れになると考えている。ただし、構成要素をすべて同時に検討するのは時間的にも難しいと考えられるため、着実に検討を進められるように、テーマを絞って、深掘りしてはどうかと考えている。今後の地域協議会では、構成要素の①から⑤のなかから、有田区における現状を踏まえ、今後、有田区地域協議会で検討を進めたいと思うテーマを一つずつ選んで、自主的審議事項として取り上げていくか、ということも含めて審議していくことを提案させていただく。

【熊木会長】

事務局からの案として、五つの構成要素から一つを選んで検討してはどうかということだが、それでいかがか。

(意見無し)

意見はないようなので、そのような方向性でいきたいと思う。それでは資料No.1のなかで出されている五つの構成要素から、有田区地域協議会で検討を進めたいと思うものについて、意見をお伺いしたい。

**【高橋秀樹委員】**

地域活性化の方向性というのは、今活動している関連団体などが書いてあるが、目指すところは裾野を広げたいという意味なのか、今活動している人たちの事業を、もっと拡大してほしいということなのか。単純に行っていることを羅列したのはよいが、事務局では活性化の概念等をどのように考えているのか聞かせてほしい。

**【佐藤所長】**

まず、今ある事業、今ある団体の皆さんの活動をサポートするという気持ちと、これからの若い皆さんの活動をサポートすることを考えている。若い皆さんにバトンタッチしていくという意味合いもあり、多岐の思いから裾野を広げたいという気持ちである。

**【高橋秀樹委員】**

単にサポートというが、各課で行っていることは違う。教育委員会がサポートしたり、公民館がサポートしたり、高齢者支援課がサポートしたりしている。行政の横の繋がりも含めた形で考えないといけない。例えば、カルチャーセンターを見ればわかるが、ゲートボール場は高齢者支援課、ペタンクやパターゴルフはスポーツ推進課であり、それぞれ管轄が違う。そういうなかでサポートする場合に、相当な勢いで、行政は覚悟を持った上で、横の繋がりをつけていかないとできないと思う。

**【佐藤所長】**

活動する皆さんへのサポートとして、まず上越市として、市の施策で動いている事業がある。それ以外に、有田区として地域のために、地域が今後将来どのようになっていくか、10年、20年、30年先のことを考えたなかで、こういうものがよいのではないか、こういう事業をしていけばよいのではないかということを踏まえ、地域活性化というものを今検討していただいている。資料にもあるが、いろいろな事業が載っている。実施済、実施中の事業、実施していない事業があるが、こちらも見えていただきながら、皆さんから構成要素を五つ作っていただいたが、まず、どの事業から有田区は取り組んでいくかというところを、本日この場で決めていただきたい。説明が足りない部分があるかもしれないが、ご了解いただきたい。

## 【高橋秀樹委員】

『地域活性化の方向性』の実現に向けた体制について」は五つに分けられ、言わんとすることはわかる。どこかで、これに焦点を絞ろうということはわかるが、「有田区における『地域活性化の方向性』は、今活動している人たちも含めてやればよいのだが、彼らは彼らなりの、それぞれの目的があるわけだから、これを行う上での弊害ももちろん出てくるのではないかと、ということも考えられ、心配である。もう一つは、今年の例を見ると、地域独自の予算の関係で8月末までに提案してほしいという話がある。私たちも新たな企画、事業として、今行おうとしていることがある。でも間に合わない。「補助金が貰えるのは来年だ」とか、「どうしても11月にやりたい」とか思うではないか。今必死になって会場から始まり、周りの企業も含めてコンタクトをとり仕掛けをやり始めているのが、このなかへ載ってこない。これは、今既存のやっていることで、新たなことといった場合。なぜかという、前回の地域協議会の時に、有田区みんなのできるようなことはないかと探していった時に、これはみんな個別だからなかなか難しいものがある。だから、例えば、この3番4番のようなカルチャーセンターを中心にして、高齢者、子どもも含めた、あらゆる世代の人たち向けの何かを考えなければ駄目だということがスタンスにあって、そのような仕掛けをしようとしているが、何しろ、日程も含めてわからない。お金もわからない。どういう仕掛けをするかということもわからないので、そういうことがテーマのなかで載ってこない。先ほどから聞いていると、地域活性化の方向性は、日程はすぐに出ない。今年はここまでやる、来年はここまでやる、3年後はここまでやるというテーマの決め方をしないと、今年1年で結果を出したいために何かやるというようなことは、かなり乱暴だと思う。これは、私の個人的な意見であり、やらないということではない。

## 【佐藤所長】

8月末というような話があったが、そこは臨機に、まずはいろいろな相談からお伺いしていきたいという心づもりでいる。

## 【熊木会長】

お金のことがメインになってくるのか。予算化することに関して、期間を区切られたり、過去の行事に対して、地域独自の予算がと言われてくると、その判断基準が各団体からするとよくわからない。今まで地域協議会で判断していたものが、市で判断するとなると、では何をもって地域の独自性というものを判断するのかという判断材料が、今

もって出てきていないという現状がある。それを市として、どのような見解をお持ちなのか、今そうした資料があれば、出していただきたいと思うが。

**【佐藤所長】**

今の話は、事業化するにあたっての市の判断基準ということでよいか。新たな地域独自の予算事業については、以前お配りしたチラシにも記載しているとおり、公共性のある事業をまずお願いしている。

**【熊木会長】**

現実問題として、高橋邦夫委員が出された学校関係にしても、他の部分にしてもそうだが、ざっくりと予算が切られるという傾向がある。だから、市が何を基準にして地域独自というスタンスを取るのかということである。例えば、ほかの区と直江津のまちなかを比較すれば、雲泥の差がある。それを地域独自という判断は、誰がどの基準で出しているのかということである。それは市のほうで判断し、最終的に財務部局の判断であり、議会に提出するにあたり、調整しながら出しているのだと思われる。そこは、以前の制度のほうの方が分かりやすく、有田区は大体このくらいという数字を示せば、それに向かっていく。判断は地域協議会が行うほうが分かりやすいシステムである。だから、今、地域独自の予算を云々と言われているが、分かりにくい。地域の特産品をとと言われても、まちなかでその地域の特産品を探すのも大変だし、それは農林水産や各課の仕事。市が民間の事業にまで入り込んで、掘り起こしてどうするのか。観光資源に結びつけるイコール性を持ってやるのであればよいが、それも打ち出しているわけではない。我々地域協議会にしてみれば、そこが見えない。それなのに地域独自とか、地域の特性を出せと言われても、逆に出せない。

**【佐藤所長】**

以前、地域活動支援事業というものがあつた。あれは予算が決まっていて、配分があつて、〇〇区はこの配分額などと、その範囲内で活動の資金等を支出するという事業であつた。そこから方針、施策が変わり、今は地域独自の予算ということだが、今ほど分かりづらいというお話をいただいた。確かに制度自体は新しく変わり、分かりづらいかもしれない。繰り返しになるが、市では、地域の独自性を生かした事業をサポートしたいという思いで、この事業を展開していただきたい。

**【熊木会長】**

独自の判断するのは、あくまでも市ではないか。何を基準にして、この案が地域独自

なのか、有田区の独自だと判断できるのか。そこが問題なのである。

有田では、有田独特の判断を持っている。他の区から見れば、「何それ」と思われることでも、有田の住民にとってみれば大事だと思ってやっていることだってある。それを一概に独自性がないと判断されては困る。他の皆さんの意見もお伺いしたい。

#### 【高橋邦夫委員】

「地域活性化の方向性」の実現に向けた体制と地域独自の予算に関わることだが、資料No.1を見ると、非常に地域協議会に重きを置いたような作り方になっている。ところが実質的にどんな権限があるかという、右側に自主的審議で三つのことをやるというだけで、あとは、連携というレベルでしかない。これは、今会長から話があったように、例えば地域独自という考え方については、地域協議会のほうに、なぜこれが地域独自でない、これは地域独自だというように判定したのかという説明も、あまり聞いたことがない。関係団体には伝えているのだろうが、これは地域協議会が地域独自の予算を提案していないから、そのようになっているのか、結果だけをポツと知らせているような気がしてならない。ところが、地域協議会に求めているのは、地域活性化の方向性について構成要素の五つを審議させている。一緒になって考えてほしい。では、これを基にして、地域と市が一緒になっていくか、ここをもっと具体的にする。そのなかで、これは予算化していこうではないかとなって、地域独自の予算になっていくのだろうと思う。その部分がすっぽり抜けていて、関係団体にポンと丸をふって、それが地域独自の予算だと。我々は審議権がないのにもかかわらず、それが地域に本当に独自なのかどうかも、わからないまま行われているということである。それは先ほど会長がいったように、これは本当に地域の独自なんだということに、地域協議会が関わってないということ自体が変な話である。地域の、特に公共的な団体、いわゆる関係団体というのは、市民も含めて、自分たちの興味関心や、自分たちのやりたい目的があってやっているのであり、地域を活性化しようと思っているわけではない。自分たちのいろいろな活動を活性化させようと思ってやっているのである。それらをバランスよく調整等していくのは、大きな団体としては町内会長協議会があるのだろうと思う。でも、そこにも話があるわけでもない。そこも、地域の独自だということを、実際には何も協議もしてない。地域について活性化の方向性を考えて、皆さんの元でようやく五つにまとめたのだが、実際に行動するときになると、全く。地域活性化の方向性というのは、地域独自の予算と地域独自の事業である。その事業について予算化するかどうかはまた別の話であり、予算化し

なくてもできるものもあるのだろうと思う。それは地域の独自の事業だということを、我々が協議できる場面があればよいが、そういう場面も残念ながらない。これから考えようというレベルと、既存の事業を基にするということになると、以前、地域の団体から提案があったから、中身は大体理解できているが、そのギャップが非常に大きいのではないかと思う。それを会長が言われており、私自身もそのことが非常に気になってしかたがない部分である。

#### 【熊木会長】

今の意見について、事務局は意見として拝聴していただきたい。

#### 【高橋秀樹委員】

市は勘違いをしている。事業内容に応じて、提案したものに対してお金をつけるといっているが、我々有田地区は税金を払っているわけである。有田地区は、この直江津地区でも、今一番大きい。ほかの区では少ない税金しか払ってないのに予算が多くついて、多くの税金を払っている我々が提案しても、理由もわからずに却下されてしまう。だから最初に配分して、または、この枠からこの枠というようなことにしてもらわないと。予算がなくてどれくらい影響が出ているかご存じなのか。子どもたちがどこかへ行くにもバス代がない。では、どこが払うのか。後援会が払わなければならなくなると、地域の負担が増える。今までどうにか足して、足りない分は後援会や関係者にお願いして捻出してきたが、私は、たった一人や二人の人間が事業の可否を判断するというのはおかしいだろうと思っている。地域協議会の人たちも今までずっと審議してきたにもかかわらず、今後は市が可否を判断するとしている。会長が言われたとおり、何をもって地域独自の予算で、その独自というのは、何をもって独自なのか。独自ということを討議したことはあるのか。独自とはどういうことをいうのかについて、誰も話していない。また、資料の内容もどうか。「利便性、さかんな産業」を作るために、地域協議会が動いているわけではない。そこを勘違いすると、幾ら頑張ってもその団体、関連団体とか、皆おんぶに抱っこだ。関連団体自体は、とりあえず良いかもしれないが、次に新たなこととなると、負担が増えて手が延びなくなる。そういうところも、もう少し冷静に、どういことをやらなければならないとか、もっと膝詰めで「学校関係でこういうことがあったが、どうなのだろうか」とか、「福祉はどうだ」とか、「有田レクはこんなことやっているけれども、資金はあるのか」ということを話さなければならないと思っている。「提案をもらったが、ここの部分はちょっと大変なんですよ」とか、そういう話をしなければ

ばどんどん質が悪くなっていく。今までは、みんな膝詰めで、「どうしようか、こうしようか」と考えた。残念ながら、有田地区はこれだけ人数が増えて、税金を払っているのに、地域独自の予算事業は後ろから数えて2番目、3番目である。地域を全部合わせても300所帯くらいしかないところと、一つの町内で300所帯あり全部合わせて1,500も2,000も所帯があるところと同じように考えるのか。そうだとしたら、この事業に携わっている人たちの感覚はずれている。普通、会社が1,000万円しか売上がないところと、2,000万円の売上があるところとでは、働く人の給料は一緒かどうか。よく言えば、みんな均等に割っているというけれど、そうは思わない。「住民が大勢住んでいる人たちが、みんなが均等に受けられる施策を考えませんか」という仕掛けをしなければいけない。地域独自の予算事業の制度自体よろしくないと思っているが、ただこれを進めるのであれば、予算のつきとは別に我々の思いを知っておいてほしい。

#### 【熊木会長】

いわゆる税の公平性ということも、多少は考慮してもらいたいということが、高橋秀樹委員の意見だと思う。高田でも、直江津でも、まちづくりセンターが担当する区は幾つもある。ところが、13区では一つの区に専従している。そういうところで、手当の質も仕事の内容も違ってきている。公平性というものを、しっかり考えてもらいたい。独自性というと農産物が出てくるが、それは農林水産課とかJAに任せておけばよい。個人の収入のこと、個人の自助努力のことを、我々がそこまでタッチして、企業化していくことはおかしいことである。我々地域協議会の委員というのは、何のために存続しているのかという初歩的なところが、最近抜けている。そんななか「こういったことをしてください」と言われても、最終的に何の権限も独自性もなく、地域協議会委員は、何の決定権もない。自主的に審議して意見書を出す、それくらいしかない。昔はこうではなかった。だから、地域のなかでは、地域協議会の認知度もどんどん下がっている。何でそんな組織があるのかといわれる。町内会があるから要らないだろうと言われれば、それまでである。むしろ、町内会のほうが仕事をしている。地域住民のためにお金を集めたり、集めたお金を各団体に分配しているのも、町内会である。そのへんを市が把握しているのかどうか。地域は地域でちゃんとお金を集めて、各団体に必要なところに配っている。本来、税金でやってしかるべきなことまでやっている。そこを見ないで、この地区の独自性が云々と言われても、我々としては困る。地域協議会委員のスタンス、立ち位置について、もっとはっきりしてもらいたい。

### 【高橋秀樹委員】

地域活性化というよりも、みんなが共通して、大勢の人が参画できるもの、組織や体制も含め、何かやれることはないか、単純にテーマを絞らない限り案は浮かんでこない。それをやる上では協力して、「学校関係はそこに協力できませんか。福祉の会は協力できませんか。有田レクは協力できませんか」というように、「実現するために後押しできないか」と仕掛けていかないと。事業費の補助は別として、何か有田全体で共通するものに着手するという仕掛けをしないと。残念ながら13区は、区全体でお祭りがあつたり、昔から伝承するものがあつたりして、非常にまとまりやすい。直江津の町も一つの町として成り立っている。有田は、あちらこちらから集まっているので、お祭りをやろう、何かやろうといっても、簡単にはいかない。方向性を考え、焦点を絞らないといけない。

### 【佐藤所長】

今、高橋秀樹委員から、貴重なお話をいただいた。我々が最初に説明した、①から⑤のなかから選択するという方法もあるし、高橋秀樹委員の提案のほうが地域全体で、みんなを取り組めるというような考え方もある。どちらの方向でいくか、ご協議いただきたい。

### 【熊木会長】

①から⑤のなかで一つセレクトしてということになると、選ぶと思えば選べると思うが、それをまた深掘りしていくことになるのだろう。

### 【内山委員】

少し後戻りになるかもしれないが、私が最近痛感するのは、合併町村の13区は、二極化している。農村部と、住居というか生活圏とがはっきり分かれている形である。地域は4番目の項にあるとおり、国籍の違いと記載されているとおり、いろいろな方々が居住されていて、考え方もいろいろで、住民も多い。1人で生活する方も、10人で生活する方も平等にというのが、行政の立場かもしれないが、先ほど会長が言われたように、13区の地域協議会のなかでも、固有の農村地帯というか、所帯数の少ないところと、有田区とは、同じ土俵で物事を解釈するのはいかなものかと思う。以前この会議に参加したときは、発言する機会は何回もなかったが、最近では意見をいってくださいと言われても、なかなか言いにくい部分がある。なぜかというと、すっきりしないからである。物事を行うと必ずお金がついて回るが、果たしてそれを企画して、やる設定をして、足りない分は、市の予算づけにお願いしても、実際に駄目だと言われれば、せっか

く段取りをしたものがなくなってしまう。自分の内輪の予算で、企画したものを実行できるかという、なかなか非常に困難な面もある。以前は、これくらいの予算のなかで、という形で動けたが、今は、企画をしても、実際にその予算がついて実行できるか否かは、はっきりしていない。このため、「何々をしたいから、意見をどんどん出してください」と言われても、以前と違って、意見を出しにくいというのが、私の正直な考えである。元に戻れないかもしれないが、その地域に応じた予算というものがある程度ないと、話だけ進めていって、結果、駄目でしたとなると、ゼロになってしまう。それをまた次の年に持ち越して、もう1回形にできるかという、おそらく無理だと思う。また、先ほど高橋秀樹委員が触れられた学校関係のお話で、私の考え方が間違っていたのだが、旧小猿屋小学校から有田小学校に移行されたときに、教育関係の備品等は、教育委員会のほうで、ほぼ揃えてもらえると思っていた。確かに新しい学校は完成し、子どももそこへ入学した。極端なことをいうと、建屋は作るが、後のものは全部地元で用意しなければならない。そういう場面があって、新しい学校ができた当時は、先生方もいろいろ苦勞をされて、足りなかったものをどうしたかという、父兄や地域の町内会長協議会のほうから負担してもらい、新しい学校の業務ができるような形になっていったのが現実である。今までは、学校関係の予算でお願いすればほぼ通っていたのが、ほとんど認められないので、私は非常に残念に思っている。この先々、もう少し子どものために何かできないかというのが、私自身の一番の願望である。

#### 【熊木会長】

実際そういうことはあろうかと思う。今まで、地域協議会に決定権があったものが、全くゼロになるわけである。この会は何のために存続しているのかという思いもある。何を基準にしているのかということが気になるし、はっきりしてほしいところである。それによっては、地域協議会はどうするのかという議論にまた戻ってしまう可能性はある。事務局が心配しているので、これ以降の議題については高橋秀樹委員が言われるように、今すぐ五つから一つ選ぶというよりも、個別に意見を出し合いながら進めていくというような、ディスカッション方式で進める以外にないかと思う。一つに絞ってもよいが、絞ってしまうとほかの外れた部分はどうするのかということにもなる。地域活性化と言われても、メンタルの部分で活性化して有田区でやったんだと満足する人もいれば、目に見えて数値化されないと満足しない人もいる。そこの部分を市も理解してほしい。次回以降は、高橋秀樹委員が言われるように、五つのなかから決めずに、議

題を提出しながらやっていく、というやり方でいかがかと思う。

**【高橋秀樹委員】**

五つあるうちの②、③、④。これを一緒に考えないと、多分有田地区は成り立たないと思う。学校の子どもたちやコミュニティのことを考えながら、カルチャーセンターを中心にして、あらゆる世代の人が参加するようなことを仕掛けないといけない。一つだけ、学校だけ、防災だけ、といってもかなり無理がある。だから、②、③、④を一緒にして、その②、③、④に共通してできることはないか、という仕掛けをしていかないといけない。先ほど内山委員から話があったが、予算がつかないからと言ってやめるのはよくない。企画する側は予算がつかなくても、やるつもりでいないと駄目である。やるためには金がなかったらどこにでも交渉してでもやる。そのとき一つの財源として、この地域独自の予算があるんだと思わないと、企画なんて危なくてできない。途中で、金がないからやめるなんて計画ならば、最初からみんなやらない。必ずやるために、「最低限でも、ここの予算はこれぐらいつけて欲しい」という意見も出てこないはず。ちなみに、有田レクにしても、有田福祉の会にしても、直東学園にしても、みんな地域独自の予算だけではない。その何倍も、町内会長協議会を出している。だから、この地域独自の予算というのは、ほんの10%とか20%の話だけれども、予算をつけてもらえば、その予算をほかに使えることにもつながる。私見としては、②、③、④を一つにして、子どもを含めて、いわば学校コミュニティを中心に、あらゆる世代の人がカルチャーセンターを中心に、「何かやれること」を検討してはどうかと思っている。

**【熊木会長】**

五つから一つと言われると非常に混乱するし、重複しているものもある。今言われるように②、③、④で一つの議題として絞っていくということがいかがか。

(委員了承)

**【佐藤所長】**

貴重な意見をいただいた。②、③、④をひとくくりで検討するというお話でいただき、この場で皆さんの了解をいただいたので、その方向で進めさせていただきたいと思う。今日は厳しいご意見もあったが、私たちが皆さんとともに進んでいきたい。

**【熊木会長】**

次回以降、②、③、④を一つとして、高橋秀樹委員の意見のとおり「何かやれること」を検討していきたい。その他について、事務局から何かあれば発言をお願いしたい。

【小川係長】

次回の協議会は、9月上旬以降の開催を考えている。日程については会長と相談し、日程が決まり次第、開催案内を送付することとしたい。

【熊木会長】

他に意見等求めるも、意見なし。

- ・会議の閉会を宣言

9 問合せ先

総合政策部 地域政策課 北部まちづくりセンター

TEL : 025-531-1337

E-mail : hokubu-machi@city.joetsu.lg.jp

10 その他

別添の会議資料もあわせてご覧ください。